

第16回白壁賞は松本主之氏らが、 第35回村上記念「胃と腸」賞は 小林正明氏らが受賞

残暑厳しい中にもようやく秋の風を感じ始めた2010年9月15日(水)、東京の笹川記念会館で開かれた早期胃癌研究会の席上にて、第16回白壁賞と第35回村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。第16回白壁賞は松本主之・他「NSAIDs 起因性小腸潰瘍と非特異性多発性小腸潰瘍症における小病変」(「胃と腸」44: 951-959, 2009)に、第35回村上記念「胃と腸」賞は小林正明・他「胃・十二指腸における collagenous colitis 類似病変の特徴」(「胃と腸」44: 2019-2028, 2009)に贈られた。

第16回白壁賞

司会の長浜隆司氏(早期胃癌研究会中央診療所)から、まず白壁賞の受賞者代表として松本主之氏(九州大学大学院医学研究院病態機能内科学)が紹介された。本賞は、故白壁彦夫氏の業績を讃え、“消化管の形態・診断学の進歩と普及に寄与した論文”に贈られるもので、「胃と腸」に掲載された論文に加え、応募論文も選考の対象となる。今回は応募論文はなく、「胃と腸」44巻に掲載された全論文が選考の対象となった。

選考委員を代表して細川治氏(横浜栄共済病院)から、画像の質、論文の独創性、疾患の重要性、文章力、形態診断治療などの観点から厳密な審査が行われたことが説明された。次いで、本論文の受賞理由を“小腸の画像診断が進み、NSAIDsに起因性する小腸病変の発生率が予想外に高く、消化管を取り扱う医師にとって大切なものとなっていることは間違いありません。著者らはこの分野では世界をリードする立場にありましたが、丹念な症例の積み重ねに基づいて新たに、重要な知見を与えてくれたことは大変喜ばしいと考えます”と解説した。

「胃と腸」編集委員長の芳野純治氏(藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院内科)は、自身が早期胃癌研究会に通い始めた頃に非特異性小腸潰瘍症について学んだことに触れ、“カプセル内視鏡や小腸のバルーン内視鏡などの新しい装置によって、このような新しい疾患が診断され、そして解明することができるようになったということに1つの歴史を感じます。よい研究をしていただきありがとうございます”と述べ、賞状と楯を贈呈した。医学書院の金原優社長からは、賞金50万円と、副賞として「胃と腸」誌の電子ジャーナルが贈られた。

受賞の挨拶として松本氏は“偉大な白壁先生のお名前



▲選考理由を述べる細川治氏。



▲祝辞を述べる芳野純治氏。

を配した賞をいただき、本当に光栄に思います。今回の論文は、非特異性多発性小腸潰瘍症とNSAIDsによる小腸潰瘍症を比較したもので、2つの疾病の原因に共通のものがあるのではないだろうか、ということが大きな結論となっております。非特異性多発性小腸潰瘍症は、私ども九州大学病態機能内科学消化器研究室で延々と引き継がれてきたテーマであり、本当に珍しい病気と言われてきましたが、今回の論文で、この疾病をもう一度周知できたと思っています。われわれのデータが、皆様の診療のお役に立てばと思います”としたうえで、共著者への謝辞を述べた。最後に、“この受賞という感動を忘れずに、また私たちよりももっと若い人に同じような感動を味わってもらえるように、今後も消化管の診療に従事して参ります”として受賞挨拶を締めくくった。

第35回村上記念「胃と腸」賞

次に、村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。本賞は、故村上忠重氏の業績を讃え、“消化器、特に消化管疾患の病態解明に寄与した論文”に贈られるもので、「胃と腸」44巻に掲載された全論文が選考の対象となった。長浜氏より受賞者代表として小林正明氏(新潟大学医学総合病院消化器内科)が紹介された後、細川氏から白壁賞と同様に厳密で慎重な選考が行われたことが報告された。次いで、本論文の概要について解説し、“collagenous colitisは日常臨床で遭遇する機会がありますが、類似する胃・十二指腸病変は世界で30例、わが国で6例の段階と聞いております。その時点で診断の肝要に関わる知見を得た著者らの努力は並大抵のものではなかったと考えます”と賛辞を述べた。

芳野氏は“「胃と腸」は画像に命をかけております。この論文には非常に素晴らしい画像が出ており、そして、その病気を解明していただき、非常にわれわれのためになったと思っています。おめでとうございます”と述べ、賞状と楯を贈呈した。金原社長からは賞金50万円



▲第16回白壁賞を受賞した松本主之氏。



▲第35回村上記念「胃と腸」賞を受賞した小林正明氏。



▲両氏には芳野氏から賞状と楯が贈られた。



▲満員の会場から拍手が贈られた。

と副賞の「胃と腸」誌の電子ジャーナルが贈られた。

受賞の挨拶として小林氏は「伝統ある、そして大変栄誉ある賞をいただき、身に余る光栄です」と述べたのち、「大学院時代から、渡辺英伸先生に「1例1例をしっかり見なさい。自ら問わなければ、標本は何も教えてくれない」と常々ご指導いただいていたが、今回改めて、1症例が非常に大事なことを、そして突き詰めて検討することが非常に大切なことを勉強させていただきました」と渡辺氏を含む共著者への感謝を示した。また、「近年、国内外でこの疾患が散見されます。非常に特徴的な内視鏡像、X線像、組織像を示しますので、この会場の

先生方にはぜひその特徴を理解していただき、次の症例の発見につなげていただきたいと思います。最後に、この村上記念「胃と腸」賞は、消化管病変の病態に迫る論文に贈られますが、残念ながら、今回のわれわれの論文は、臨床・病理学的な特徴を記述したにすぎないかと思っています。今後は、collagenous gastritisの病因や病態の解明を目指しまして、さらなる努力を続けていきたいと思っています。本日は本当にありがとうございました」と述べ、挨拶を終えた。

最後に、両賞の受賞者に向けて、改めて満員の会場から賞賛の拍手が贈られ、授賞式は終了した。